

団体名	NPO法人COLLECTIVE	活動タイトル	森林環境教育みらいプログラム
活動対象地域における生物多様性の保全に関する現状と課題			■ 活動風景
<p>【森林環境の現状と課題】 現在、日本の森林面積は2,500万ha（67%）であり世界でも有数の森林大国である。一方で、林業家の担い手不足や外国産材の輸入により放置林問題が急速に進み約80%の森林が管理されず放置されている。その結果、土砂災害や水源確保など様々な問題にも発展している。森林環境税（600億円）により、森林への関心や森林ボランティアは増加しているものの放置林の改善には至っていない。そこで重要なのが、次世代の担い手となる子どもたちにもっと森林を体験してもらい、関心度を高めたり従事者を増やしていくことにあると考える。</p> <p>【教育現場の現状と課題】 小学校4～6年生の学習では、社会科や理科を中心に森林環境や生物多様性についての学習を行っている。教科書やデジタル教材では、日本各地の事例を取り上げながら詳細に説明がされており、知識の定着が図られている。しかし、現在の授業では本や映像での学習が中心となっており、林業従事者のリアルな話を聞いたり、体験的に学んだりする機会が非常に少ない。特に、都心部の学校においては場所や資金、時間等の制約があり体験的な学習を行うことが困難である。</p> <p>そこで森林環境教育みらいプログラムでは、東京都内の小学校を対象に森林関連NPOによる講演（森づくりフォーラム）、林業体験（青梅林業研究グループ）、森林環境問題に関する課題解決ワークショップを行い、自分たちの未来を自分たちで考える教育機会を提供する。</p>			<p><b>活動の様子1</b></p>  <p>事前学習で学んだことを活かして、児童が選木と伐倒をしている様子。この後、全員でロープを引っ張り間伐をする。</p>
■ 活動報告		■ 1年間の目標に対する達成状況(まとめ)	
<p>【目的】 ・森林に対して主体的で責任ある人材を育成するために森林での体験学習と学校での課題解決学習、プレゼン発表を実施</p> <p>【実施校：4校215名】 令和5年9月1日～令和6年8月31日 ・青梅市立河辺小学校5年生2クラス 69名 ・品川区立大井第一小学校5年生2クラス 125名 ・探究スクール4～5年生 7名 ・千葉大学教育学部附属小学校 5年生 14名</p> <p>【内容】 ①小学校へ講師を派遣し、森林環境問題のゲストティーチング実施 ②青梅市成木の森林フィールドで林業体験学習を実施 ③総合的な学習の時間、社会科の学習で「森林を活用した生活を考える」をテーマに各校で探求学習を実施 ④子どもたちのアイデアを発表するためのプレゼン大会を実施</p>		<p>【今年度新たに得られた成果等】 まず実施校を決定する段階で多くの学校から申し入れがあった。学校へのヒアリングを行うと、社会課題や自然環境への関心の高まりと体験的な学びの場に魅力があるとの意見を聞くことができた。現在、国連が打ち出すエージェンシーの育成にも大きく関わる「社会課題に対して責任ある行動が取れる人材」を学校教育でも育てる意識が高いことが分かった。また、森林体験学習に参加した児童教員が林業の重要性と自然環境の問題を取り上げて話している場面をたくさん見た。また、プレゼン大会では子供たちが自身の生活や家族に結びつけて森林環境を守ったり、活用したり、商品を考えたりする発表がとても多く、主体的な姿が育っていることを肌で感じた。そこで、この事業を今後も継続的に実施していくことで多くの児童、大人が社会課題に向き合って自分ごととして捉えるきっかけを作っていけると確信した。</p>	
■ 事業を通じて得られたノウハウ		■ 望ましい社会状況を達成するための課題	
<p>本事業を通して、森林環境を学校へ提供する上での課題点に多く気づくことができた。1つは「寄付金調達」である。今回の体験学習時に関心のある企業が3社見学に来ていた。この企業を中心に、寄付営業を行い、少しでも森林環境教育に対して企業寄付が集まるように営業を強化していきたい。一方で、ファンドレイジングの難しさを痛感している。トライ＆エラーで寄付営業を繰り返す必要がある。もう1つが「多様な体験場所」を準備することである。受け入れ団体が青梅林業研究グループに絞られていたため4校採択が限界であった。そこで、千葉県船橋市、神奈川県秦野市、東京都高尾の森と三箇所のネットワークを作って受入場所を開拓した。来年度は、受け入れコンテンツを増やしより多くの採択が実現するように努める。</p>		<p>学校の先生と協働して総合的な学習の時間や社会科で探求学習を行なったことで、子供たちが出前授業や体験から得た課題に対して取り組む姿がとても主体的であった。特に、インターネットで調べるだけでなく、家族や教員へのインタビューを行うグループがあったり、中島林業さんへオンライン会議ツールを使って質問したりと多くの工夫をして課題解決に取り組んでいた。課題点としては、時間や交通費の問題で学校での探求学習に足を運ぶことができなかった点である。来年度は、寄付金を増やしコーディネーター交通費を確保していくよう努める。</p> <p>森林体験学習の実施に当たっては、青梅林業研究グループの協力もあり概ね円滑に進めることができた。課題点として、体験的な学びを探求的な学習へと移行していく授業スキルを高めることにあると考えている。今年度の事業に加えて、指導者のスキル向上にも努めていく必要があると考える。</p>	
■ 活動成果のアピールポイント（自由記入）			
この1年間の活動を通じて	<p>都内の小学生が、多摩産材の存在や従事する人の課題に触れ、その課題を解決するために話し合うことで、主体的に森林課題に取り組もうとする態度を育成すること</p>	を達成しました。	
■ 受益者の具体的な変化（自由記入）			
アンケート結果から、参加した児童の7割が「森林課題や自然との共生」に関心をもつことができたことがわかった。実施前より約3割増加している。この活動を続けていくことで、普段自然と関わることが少ない人々も、自然環境や生き物との共生に関心をもって日常生活を送る社会を作ることができると思う。			